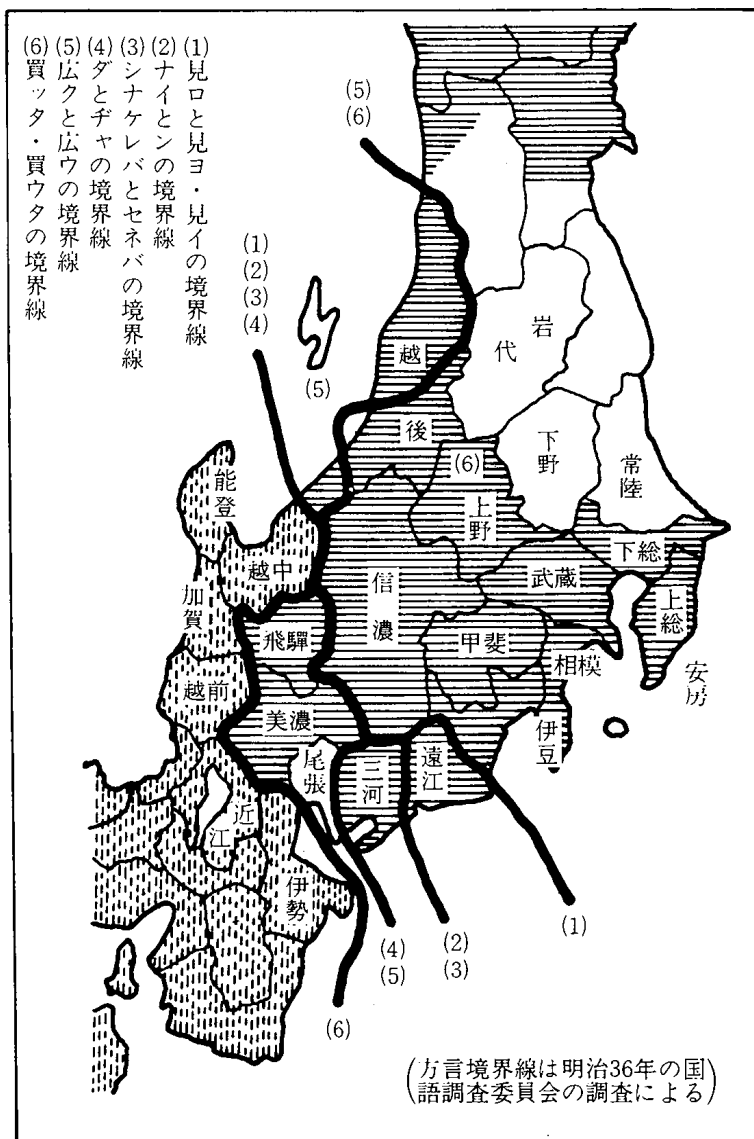


長野県方言の特質

一 東西方言の境界

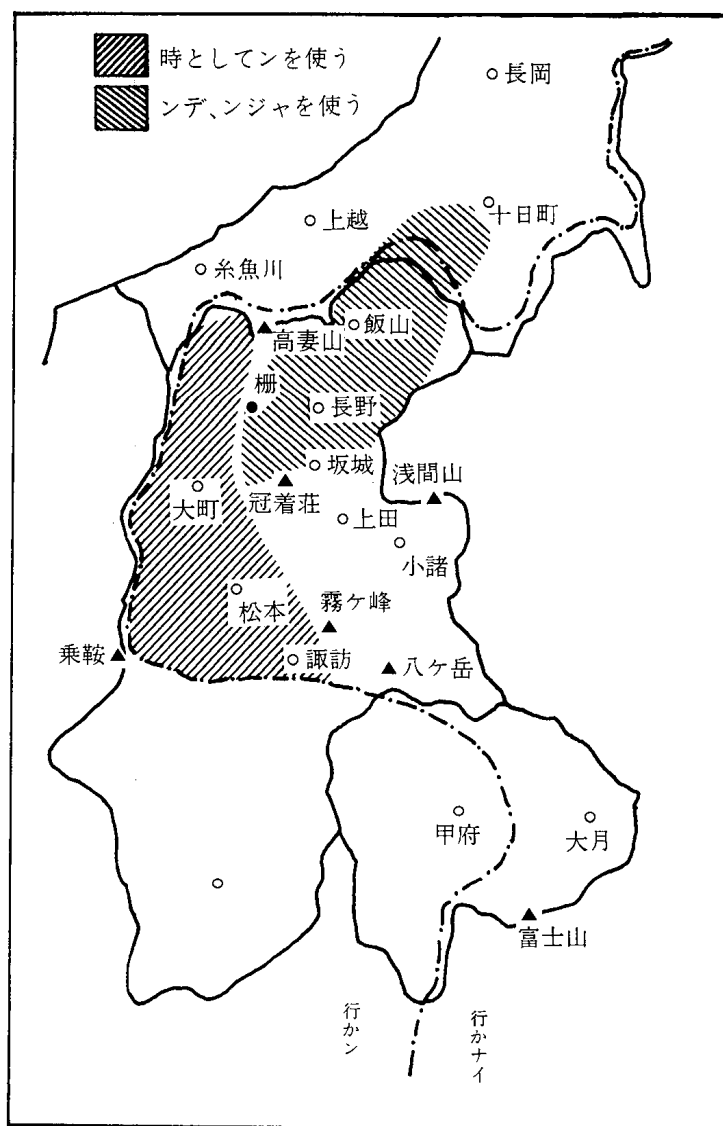
長野県方言の特質は、その地理的位置が決定的な要因となって形成されたものと見る事ができる。すなわち長野県は本州中部の東端に位置しており、富山——岐阜両県との県境に北アルプス、中央アルプスが連なり、さらにその南には、静岡県境にわたって南アルプスが走って、中央高地の背骨を作っている。このことは本州を西と東に分ける方言境界線のいくつかが長野県

〔図1〕 東西方言境界線



青木千代吉

〔図2〕長野県におけるンとその類語の分布



に関係を持って走っているという現象を招来する原因となっている。

つまり、本州の東部地方と西部地方にはそれぞれ特色のあることば（方言）が、遠い古代から用いられてきた。その東・西両地方の分布範囲の末端を示す線、東西方言境界線が長野県西部地区に集中してくる（図1）のを見ても、長

野県の地理的位置と地形の事情が言語の伝播に関して大きく関係していると考えることができる。

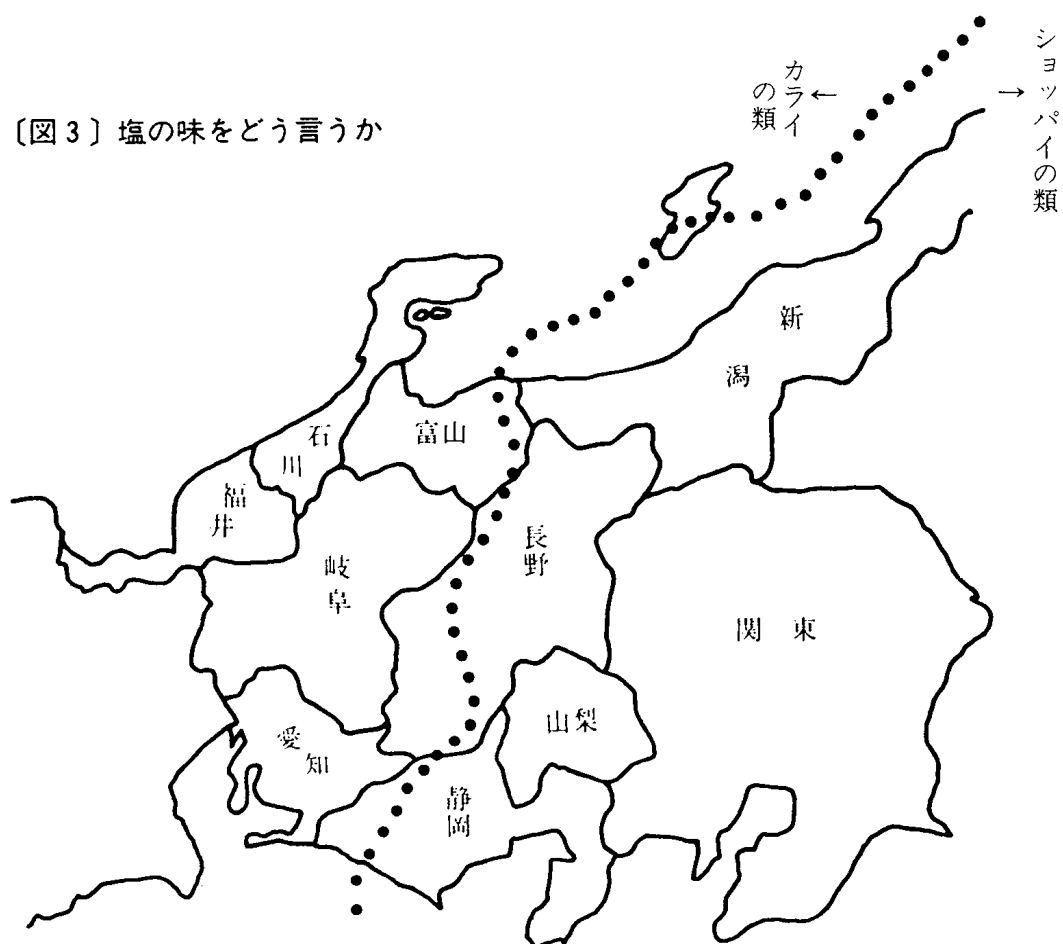
さて図1は、明治三十六年、国語調査委員の調査による結果である。これを見ると、調査の指標としての六つの言

い方（方言）の境界がはっきりわかるが、この調査は、早い時期に行われたものであるために必ずしも精密なものではないところもある。たとえば(2)ナイとンの境界線は、図2のようになるという調査がある。（昭和四十四年、牛山初男『東西方言の境界』）しかし図1の業績は、八十数年前のものとして、日本の方言研究にとって見過すことのできない貴重なものである。

日本的な視野と課題での方言調査として特記すべきものに『日本言語地図六巻』がある。（昭和四十一年～四十九年刊）

この日本言語地図の中に「塩の味をどう言うか」「茹を何と言うか」を調

〔図3〕 塩の味をどう言うか



〔図4〕

茄の境界線



べたものがある。それを図3と図4に掲げた。これを見ると、西日本、東日本の言い方の分布境界がやはり長野県の西部地方に関係をもつものとなっていることがわかる。

こうして長野県方言の特質の最たるものは、本県が本州西部方言地方に隣接するものとして、その影響を受けている東部方言地方に在ることである。

二 周辺地方からの言語波紋

県歌「信濃の国」に、

信濃の国は十州に境連ぬる国にして

と歌われているように、長野県は周辺がすべて陸つづきで、それが関東、東海、東山、北越という、それぞれの文化地帯である。このことは、言語の上でも、関東系、東海系……と、それぞれの方言地帯と連なっており、そのそれぞれの周辺地帯との方言交流があるわけで、それを、「中部波紋」「北越波紋」「関東波紋」として扱ってみることにする。

(1) 中部波紋

ここで中部波紋というのは、中部地方に広く分布するも

のは勿論のこと、本州西部から中部にかけて広く分布するものをふくめている。

図5は、「明々後日」をどう言っているかを調べた言語地図である。

この図によると、本州西部から中部にかけて、シアサツテが使われている。また、サンアサツテが三つの島のようになかつこうに断ち切られた分布相となっている。

そして、ヤノアサツテは、新潟県と富山県境から、長野県の小野と辰野を分断して山梨県の西境を南に下り、駿河湾に下る境界線の東側一帯にわたる地方から東北全域にかけての広い地方に分布していることが一目してわかる。

ここで注目したいのは、ヤノアサツテとシアサツテの境界線が長野県を二分していることである。そしてこの境界線の走り方を見ると、長野県南部のシアサツテは、愛知県・静岡県など東海地方から北上したもののようと思われる。

さて、小野と辰野といえは中央線の駅で言えば隣同士であるが、この両地の人の間では、

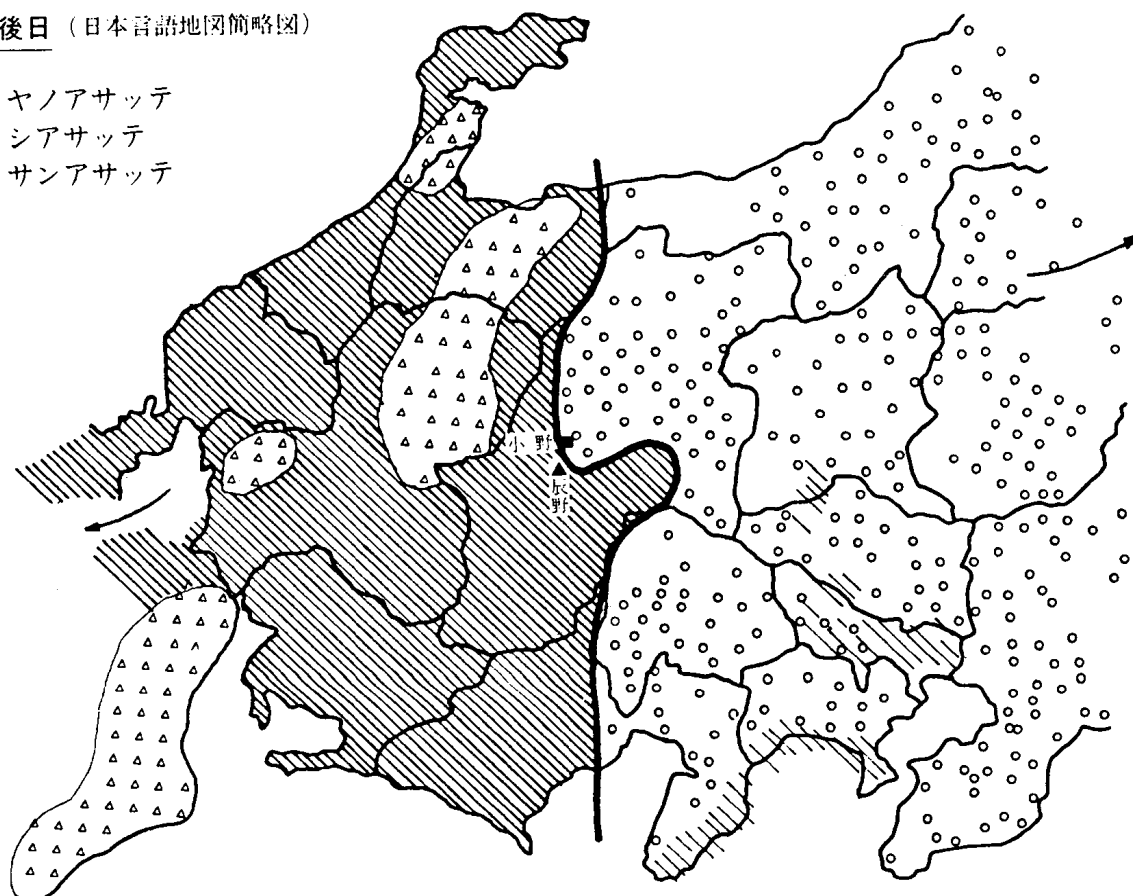
「シアサツテの十二時に〇〇で逢いましょう。」

というような約束では、一日ずれていて逢えなかったとい

〔図 5〕

明々後日（日本言語地図簡略図）

- ヤノアサツテ
- ▨ シアサツテ
- △ サンアサツテ



う行き違いが起きることになってしまうわけである。それはともかくとして、信越地方——関東地方——東北地方に広く分布するヤノアサツテという語の成り立ちは「弥やのアサツテ」であると言われている。「弥やの…」というのは、「更にその上の」ということであるから「弥やのアサツテ」は、アサツテのその上の日、という意味を表わすことばであった。

そして「シアサツテ」は「四しアサツテ」ということ、つまり「今日」を「一いち」として四番目の日ということであろう。

なお、「サンアサツテ」は「三さんアサツテ」であろうが、これは「明日あす」を「一いち」と数えて三番目の日ということなのであろう。

また、このサンアサツテは現在断ち切られた島のように分布しているが、一時代前には中部地方から近畿地方にかけて広く分布していたものが、後に起った「シアサツテ」の拡張によって次第に分断されてきたものと考えられる。

次に、東京都一帯および相模湾沿岸地方にシアサツテが見られるが、これはこの地方に新しく西部から中部にかけ

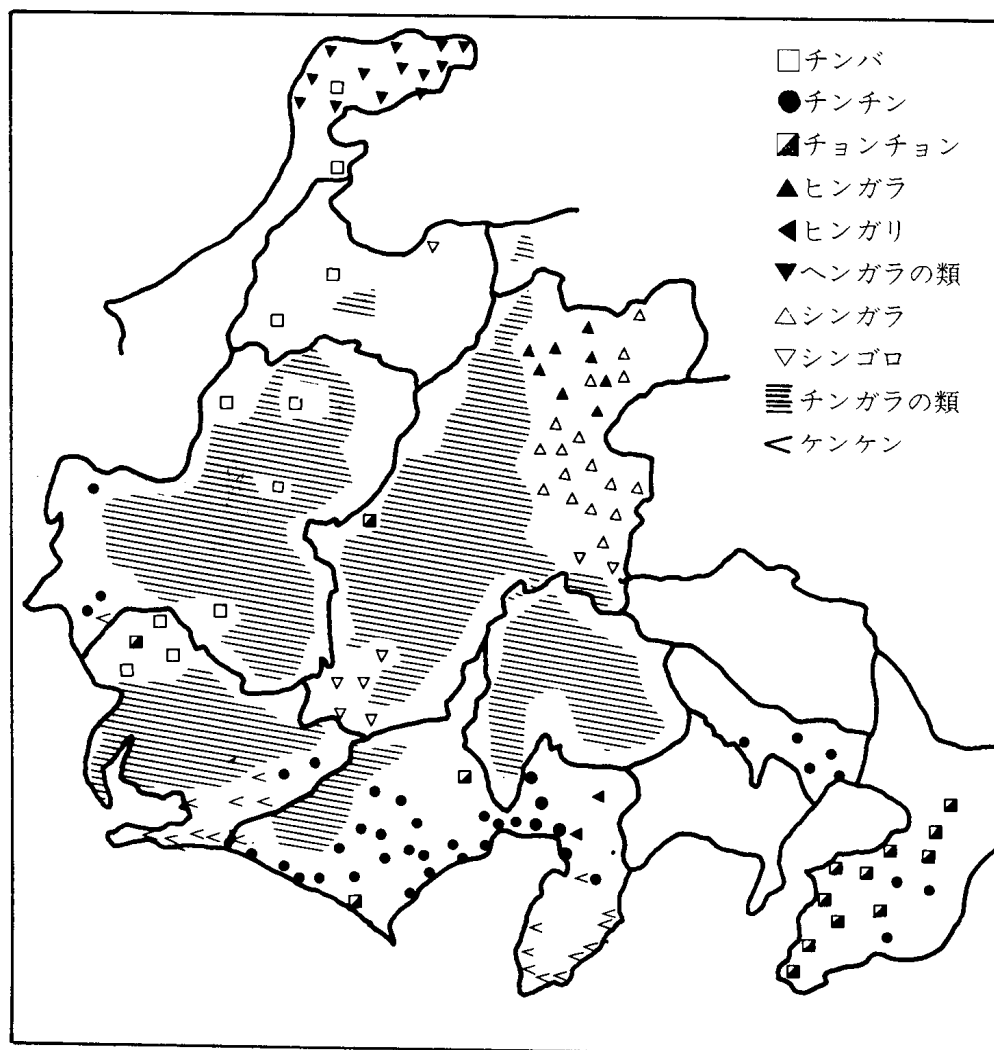
て分布しているシアサツテの移入拡張の分布であると見てよいものである。

図6は、「片足飛び」の、本州中部の方言分布で、図の繁雑化をさけるために共通語となっている「かたあしとび」という語形は図示することを省略したものである。

この図を見ると、「ヒンガラ」の類（▲・△・▼・△・▽の記号で表わしたもの）が、能登半島から長野県の北信——東信地方一帯に分布し、さらに静岡県西部にも点在している。

この分布は、ある時代に文化の中心地畿内地方から放射した**ヒンガラ**の類が、能登半島から伊豆半島にわたる本州中部の東端地方まで広く分布していたこと、そしてつぎの言語波紋としての「**チンガラ**」の類（≡≡≡の記号で表わしたもの）の発生と拡張によって、**ヒンガラ**の類は、図のように分断された分布となつたことが推測される。そしてチンガラ

〔図6〕かたあしとびの方言（日本言語地図簡略図）



張分布が、長野県の東信・北信地方には及んでいないことが注目される。これは「かたあしとび」の方言の第二波の

東限を示すものとして興味ある分布相である。

また□の記号で示されている「チンバ」が能登半島・富山県・岐阜県・愛知県に点々と分布しているが、この分布相は、ヒンガラの類よりも一時代前にこれらの地方一帯に分布していたことを推測させる。

さて、これらの語の語源について記しておこう。片足飛びのことをチンバと命名したのは説明するまでもない。

・印の記号で示された「チンチン」は、チンバの「チン」に由来する擬態語、つまり飛びはねる動作を音声化したものと思われる。

それではヒンガラの語源はどうであろうか。長野県の北信地方では、視線の片寄った目、斜視のことを「ヒガメ」と言う。もともとひがめ（僻目）は、まちがって見えること、また見あやまりの意で、「ひがむ」と同じ語源の語、「ひが耳」「ひが覚え」「ひが侍ざむらい」など一連の語が古代からの文献に見られるが、これらのヒガは片寄ったこと、まちがったことを意味する。

一方、斜視を意味することばに「ヒガラメ（中世語）」、「ヒンガラメ（近世語）」があり、このヒガラメ、ヒンガ

ラメは、現代の方言として関東各地、西日本各地に使われていることが報告されている。

北信地方のヒガメも、上記一連の「ヒガ：」という語構成の諸語と同類のもので、「正常でない、片寄った目」という把握から命名されたものである。

さて、片足飛びについても、それは両足で歩くことに對して「正常でない飛び方」という把握が成立し得る。したがって片足飛びを表わすヒンガラは、「ヒンガラトビ」（北信各地）のことなのである。

現在、能登半島——長野県東北部——静岡県東部という連続線を想定することができるよう分布しているヒンガラの類は、文化の中心地であつた近畿を中心に、ヒンガラメという語が成立し、それが中部地方にまで広く使われるようになっていくにつれて、片足飛びをヒンガラ（トビ）という言い方が発生したものと思われる。

ついでながら、東信地方と北信最北部数地点はシンガラという語形となっているが、この地方はヒ₁シの音転化のきわめて強い所であるから、このシンガラは、ヒンガラの

転化形と見ることができる。

もう一つ、中部一帯に最も勢力のあるチンガラは、チン
チンという語とヒンガラの混成形である。つまりチンチン
やヒンガラよりも後に発生し拡張したものである。

なおケンケンの語源は「蹴る蹴る」であろう。

(2) 北越波紋

ここで北越波紋というのは、北陸——新潟県にわたる方言現象が、長野県に伝播してきているもののことである。

まずアクセントについて著しい現象を指摘してみる。図7に示したように、狐・毬(マリ)・川・橋・胸・紙の「南限線」と記したのは、たとえば、胸・紙の二語のアクセントは、松代——篠ノ井——戸隠を結ぶ線まで、新潟県下のアクセントと同じ0型である、その線を越えた屋代以南では2型アクセントになるという事実を示したものである。したがって、狐・毬・川・橋・胸・紙という四本のアクセントの南限線が、北から波紋を描いて北信地方にはいり込んできていることがわかる。

注 0型、というのは平板型アクセント。

2型、というのは、第二拍が高く発音されるアクセント。

1型、第一拍が高く発音されるもの。

ついでながら、「できない・とれない」の2型北限線というのは、この関東型のアクセントが屋代まで使われている、篠ノ井以北では平板型(0型)になる事実を示している。

次に文化の中心地であった京都から放射されたことだが、京都——北陸——新潟——北信地方と伝播した語について、二つの例を挙げてみる。図8は、右のような経路で新潟県から、千曲川沿いに北信地方に伝播したものである。

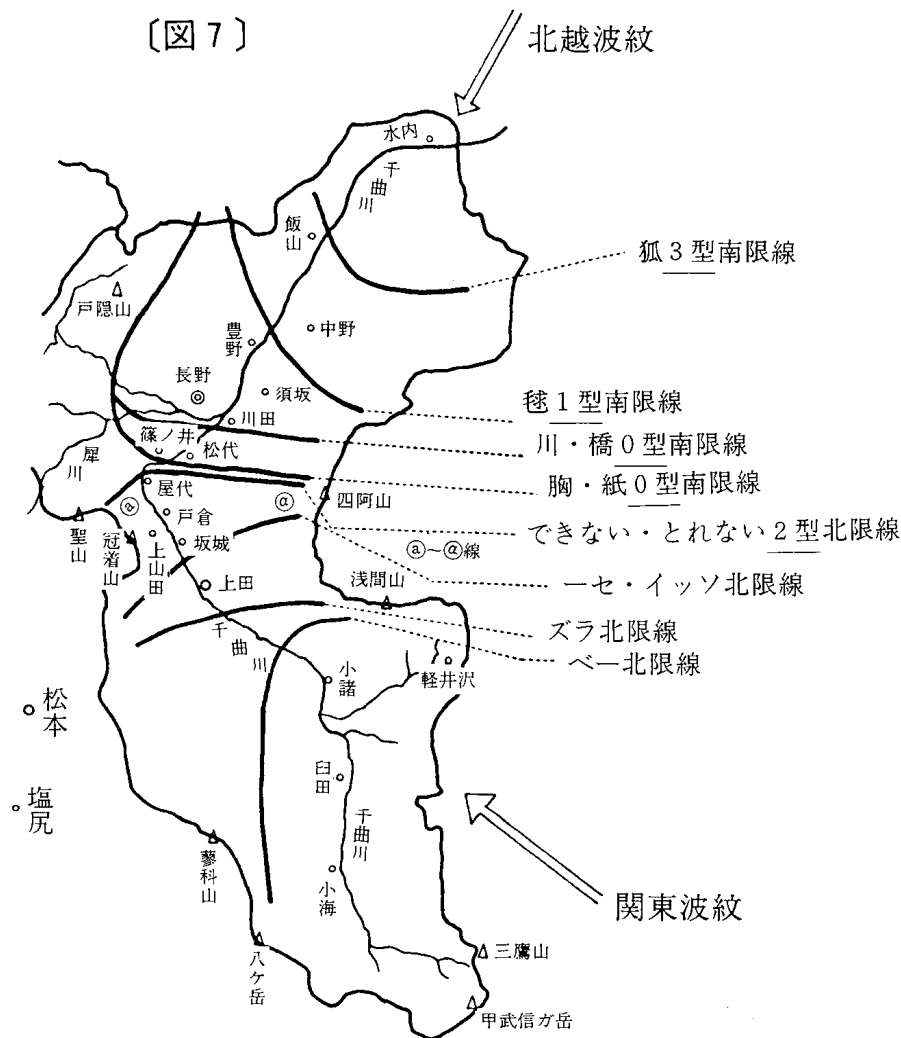
① 親愛語「タイ」

北信地方では、親しい者同士、したがって家庭内では子どもが親に対する場合にもよく使う、親愛語に次の言い方がある。

早く帰って来タイよ。

それは止めておいタイ。

これを持って行っタイ。



右のように使われている「タイ」は現在は丁寧語的な語性となっているが、その出自は、古代語の「賜ぶ」であると考えたい。

竹取物語に「娘を我に賜^たべ（お与え下さい）」という用例があり、また平家物語にも、

「黒き馬の太うたくましいに黄覆輪の鞍置て、かの僧に賜^たびにけり（お与えになった）」

などの用例があり、古代の尊敬語の代表的なものの一つである。

さて北信地方で使われる「タイ」は、図8のように分布している。これは、前記の竹取物語や平家物語に使われている「タベ」が、福井・石川・富山の諸県に伝わり、さらに新潟県に伝わったものが、千曲川をさかのぼって北信地方に使われているものと考ええる。その根拠として、石川県の山中温泉地方、美川町では、

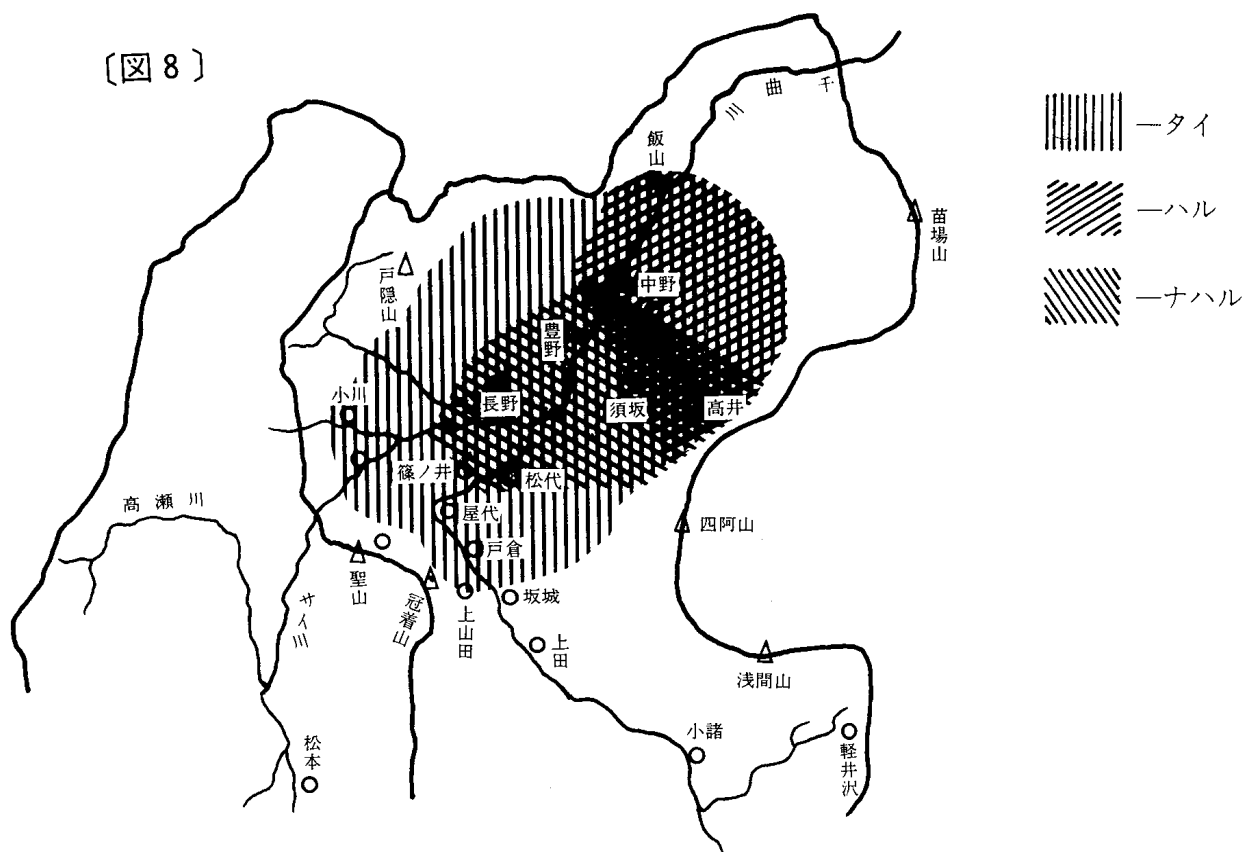
早く来てタイ（おいで下さい）

私に貸してタイ（お貸し下さい）

この子に乳を飲ませてタイ（飲ませて下さい）

という用法があり、また秋田県角ノ館市にもこの「タイ」

〔図 8〕



が使われていることが指摘されていることを挙げることができる。つまり京都地方から日本海沿いに放射伝播した「タベ」が、「てタイ」「タイ」という語として北信地方にまで伝わったものと考ええる。再言すれば、平安朝期の「タベ」の音韻転化形がこの地方に分布しているのである。

② 尊敬語「ハル・ナハル」の変化形

敬語の助動詞として「ハル」の変化形と「ナハル」の変
化形が、図 8 に示した地域に使われている。

A へハルの変化形 B へナハルの変化形

どこまで行かんだい ———— どこまで行きナルんだい

お昼食べらったかい ———— お昼食べナッタかい

寄っていかればいいのに ———— 寄っていきナレばいいの

に

よくかせガルこと ———— よくかせぎナルこと

右のように使われる A 類の言い方は、京阪語「ハル」、つ
まり、

お上りさんがギョーサン来やハッタ。

あんたハン、なんで泣いてハルの？

のように使われてきた敬語の助動詞ハルの用法に対応し、B類の言い方は「ナハル」に対応するものと思われる。

さて、このA類の言い方が行なわれる下高井地方、またB類が使われている上高井、須坂地方では「あなた」という二人称に対応することばとして「オマン」を使ってきた。つまり関西系の代名詞「オマ・ハン」のハが脱落した形である。ハという音は不安定で脱落しやすい。このことを考え合わせると、A類の言い方は「ハル」、B類の言い方は「ナハル」の変形形であると考えてよいと思われる。

そして、関西地方方言のハルは、ナサルVナハルVハルと転化して生まれた語であると言われている。このことについて、北信地方のA・B類の分布(第8図)も、隣接の新潟県からB類が伝播し、次いでA類が伝わったことを直観させてくれる相を示している。

さてA類のハルの変形形を、原形としてのハルと対応させてみると次のようになる。

〈原形〉 〈変形形〉

行かハル 行かハル

ならハル時 ならハル時

行かハッタ 行かッタ

ならハッタ ならッタ

休まハッて 休まッて

行かハレば 行かレば

こうして、この地方のハルの変形形には助動詞としての、命令形を欠くすべての活用形が認められる。(ナルには、ナレという命令形がある。)

(3) 関東波紋

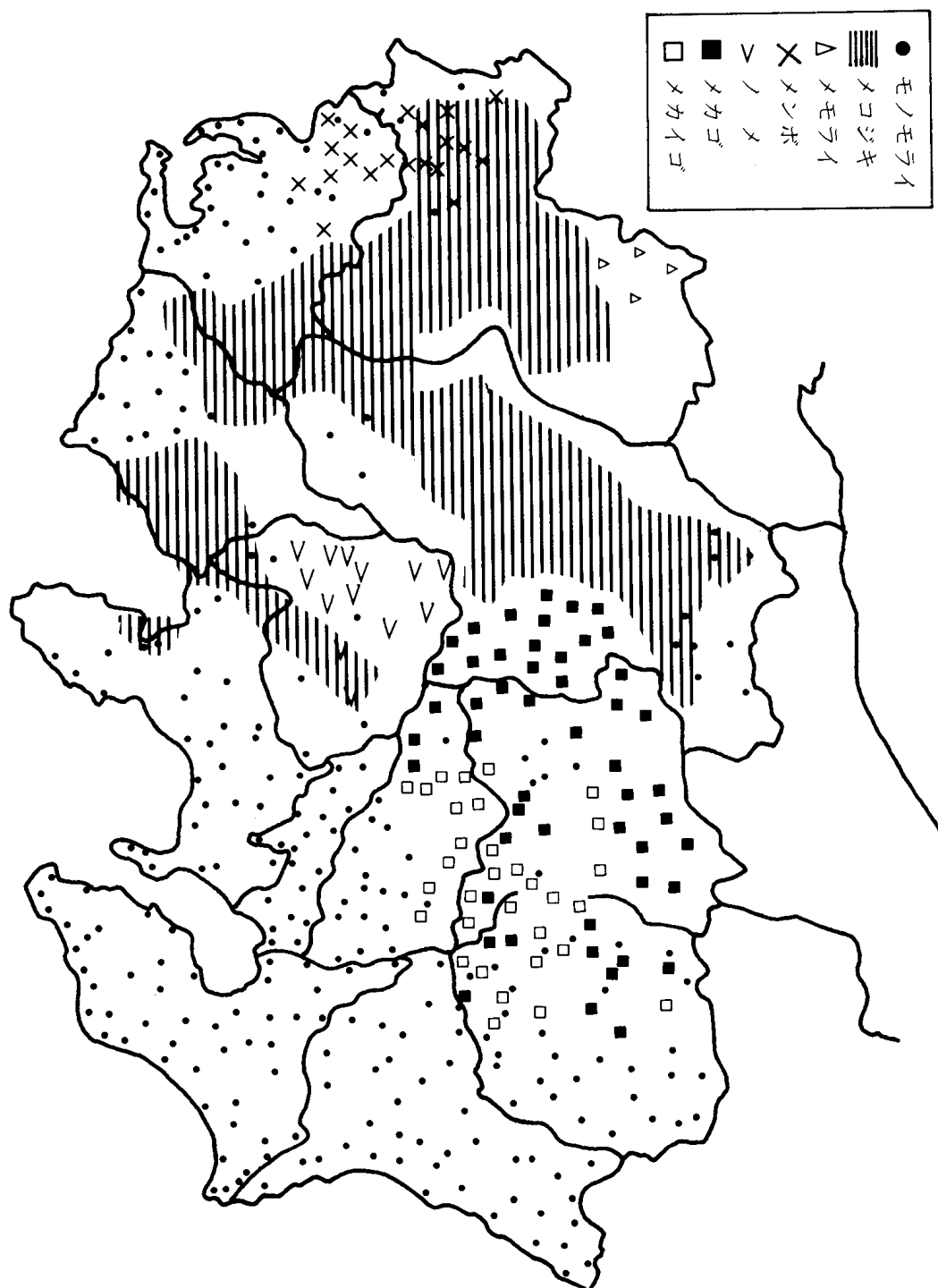
① 「ものもらい」の方言

図9は、中部・関東地方の、モノモライの方言分布図である。この図から方言分布上のいろいろなことがわかるが、長野県についてだけ言うと、大づかみに見て東信地方がメカゴの専用地帯であり、中・南信地方は、東海・東山地方に広く分布したメコジキの専用地帯である。

私の臨地調査の実感では、東信地方の人々は、メカゴこそが自分たちの土地のことばで、モノモライは新しく伝わったことば、知ってはいるが自分たちのことばはメカゴで

〔図 9〕

中部・関東のものもらいの方言（日本語地図簡略図）

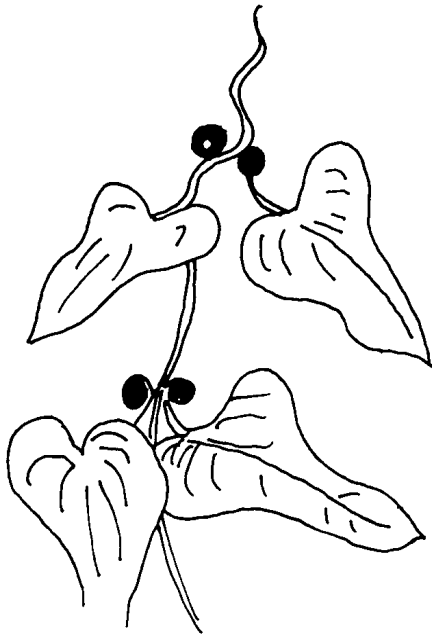


ある、と誰もが思っている、それほど地域に密着し、人々の言語生活の中に生きていることばであった。

このメカゴとその類語は、隣接の群馬、栃木、埼玉の三県にわたって広く使われることばであること、この北関東地方でも共通語としてのモノモライは、ほんのわずかしかな伝わっていないことがこの図からわかる。こうして東信地方は、北関東地方からの放射によるメカゴ専用地帯となっていることがわかる。

さてメカゴの語源は、ヤマイモや長芋の葉のつけねにぷつぷりできる珠芽(零余子)——ムカゴに由来するであろう。

長芋のむかご



人々はモノモライを、メのふちにぷつぷりできたムカゴと見た。そういう把握から、このメカゴが生まれた。つまりメ(目)とムカゴの混成語であろう。(東信地方全般にヤマノイモなどの零余子(珠芽)を「ムカゴ」と言う所が点在することが、そう考える根拠となりうる。

② 場所、方向を表わす「セ」

佐久地方には、

上セエツケル

(上に載せる)

山セでかけた

(山へでかけた)

ここエセ持つてこう(ここへ持つて来い)

という言い方がよく使われている。これは上田小県地方でも老年層で使われるのでかつては東信全域に分布したものであろう。ここに現れる「セ」は場所・方向を示す助詞であるが、右の第三例に「エセ」というふうになつの助詞が重用されることもあるが、これは共通語の助詞「へ」の混肴形として現れたものである。室町時代には、

京へ、筑紫ニ、板東サ

という成句があつていろいろな書物に見えていることが知

られている。これは当時の口語で場所・方向を表わすのに、京都ではたとえば「都へ上^レぼる」と言い、筑紫の国では「都ニ上^レぼる」、阪東（関東）では「都サ上^レぼる」のように言くと、いわば当時の方言の差異を口調のよい句として言い表わしたものである。

東信地方の「―セ」という語は、この「阪東サ」の「サ」の系統のものであることは言うまでもなからう。関東・東北で、

畑サ行く 早く家サ帰れ

のように使われている助詞の「サ」は、万葉集に「たたさ（縦の方）、よこさ（横の方）」と用いられている場合の「サ」で方向を表わす助詞である。東京都八丈島では

東京シャン行く （東京へ行く）

上シマシャン上る（上の方へ上る）

と言うが、「このシャン」も方向を表わす助詞の「サ」と同系の語、「サマ」と同じ語源のものと扱えるであろう。

東信地方のセは、東北——関東地方のサ・シャンと共に、古典にも見られる語なのである。

三 長野県方言

① まぶしいの方言

図10は、日本言語地図「まぶしい」の簡略図である。この図によると共通語「まぶしい」に対応する長野県方言は四つあることと、その分布の様相が一見してわかる。

マジッポイは、長野県では東信地方一帯にわたって使われてきたもので、この地方の代表的な方言である。

マジッペなあ!! （まぶしいなあ!!）

マジッポクてしようがねえ。（まぶしくてしようがない）

語感のよい表現価値の高いことばである。これは北関東から東北地方全体に分布しているが、図からもわかるように、埼玉・群馬両県には、共通語「まぶしい」が進出してきて、その勢力はしだいにマジッポイの分布を狭めてきている。

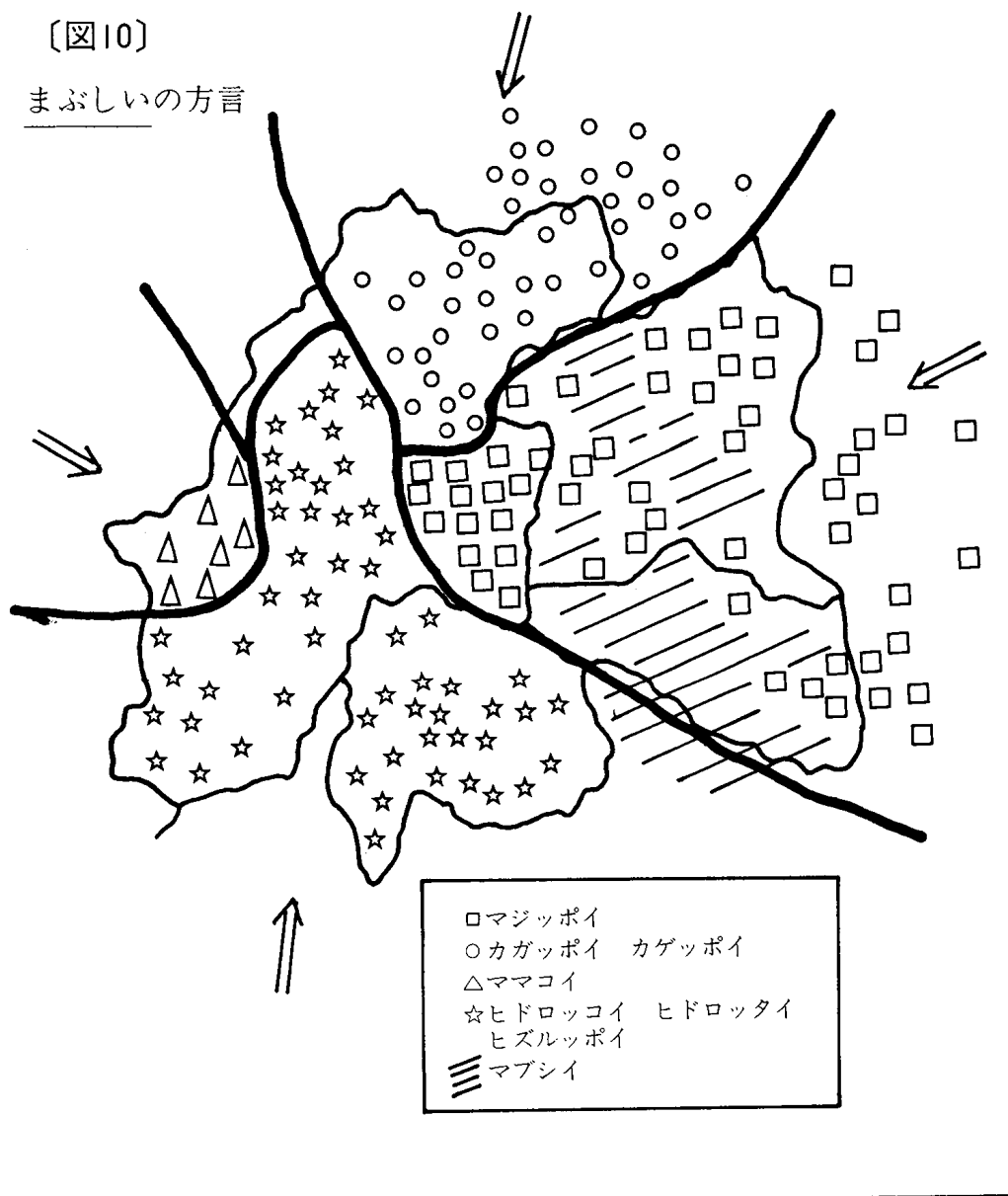
さて東信地方は、東北——関東にわたって広く分布するマジッポイの西端地域であることがよくわかる。そしてこの地方には「まぶしい」が進出してきていない。私の臨地

調査の実感では、インフォーマントのすべての人々が、「まぶしい」は新しいことばとして知ってはいるが、自分が使

「マジッポイ」→「マジロギッポイ」→「マジッポイ」

〔図10〕

まぶしいの方言



うのはマジッポイということばである、と答えてくれた。そこにこの地の人々のこの語に対する意識を汲みとることができた。

このマジッポイの語源は何か。

- ・身じろぎもせず
- ・まじろぎもしない
- ・たじろぐこともなく

という句の中の「身じろぎ・まじろぎ・たじろぐ」という三つの複合語から「シロク」という単位語を取り出すことができるが、これは「こまかに動く」という意味の語である。そこでマジッポイの語源を「マジロギッポイ」ではないかと考えてみる。だがそれだけではそう着想してみたにすぎない。それで日本言語地図を丹念に調べてみたら、茨城県下に「マ

という語形の変化を考える有力な手がかりになる。マジッポイは、目をパチパチとこまかに動かしたい感じということを表わすマジロギッポイから語形が変わったものと考えておきたい。

次に新潟県から伝播したカゲッポイ、カガッポイ。この「カゲ」は古語で「光」のこと。「カガ」は「輝く」の語根であるから、光っぽい、輝きっぽい、というのがこの方言の語源である。

次に静岡県など東海方面から伝播したヒドロッコイの系統の方言について、これは「日著^{ひしる}し」が語源であろう。つまり、

ヒジルイ→ヒズルイ→ヒズルッポイ→ヒドロッコイ

のように語形が移動したものと思われる。

最後にママコイについて。これは「目映^{まば}ゆし」の系統の語である。mabakoi > mamakoi と音韻が転化したもの。この(b)と(m)はいずれも両唇音で、交替し易い音である。(ケブリ、ケムリ、サビシイ、サムシイ等の交替例がある。) 　　こうして長野県内に分布する「まぶしい」の方言は、す

べて目が輝き、またたきしたい感じだという意味を表わす語である。

そしてその各語の分布の様相は、周辺各地からの言語放射が、長野県内にそれぞれの分布範囲を持ち、相對峙しているという形である。この分布相は本県の方言分布の特色を象徴的に示している。

② ズ　ク

長野県方言の代表的な語を一つということになれば、私はためらうことなく「ズク」という語を挙げる。

1 この寒いのかせぎなさるなあ、おめさんはズクがあること！

2 おれもズクを出してがんばるか。

3 年をとったせいかなズクがなくなって困る。

4 あの男ときたらズクヤミばかりしてしょうがねえ。

5 大ズク^{おお}はあるが小ズクがねえ。

このように使われる「ズク」ことばの表わす意味は何なのか。1・2・3の場合は「精を出す」または「精が出る」

という意味である。4の場合は「骨惜しみをする」に相当する。「ズクをやム」という慣用句も使われるが、この「ヤム」は「病む」であろう。5の「大ズク・小ズク」は、大きな仕事に立ち向かう気力、また、こまごましたことに積極的に立ちはたらく活力、ということである。

さて、ズクの意味をまとめて言ってみれば、「人間の生産創造活動に立ち向かう気力・活動力」ということになる。すなわち仕事に立ち向かう精神・肉体的な積極性、と言ってもよい。

それではズクの語源は何か。長野県方言では、下伊那地方に「ズカ」足の甲骨」ということが使われてきた。

また諏訪の山浦地方では、

「この野郎、ぼやぼやしてるとズカぶっぱしよるぞ」という、すがすがしく小気味のよいことを聞いたことがある。この場合のズカは、「向うずね」のことである。足の甲骨、また向うずねに通ずるものは「骨」である。私は何時のころからか、長野県下に使われている「ズク」と、下伊那・諏訪山浦地方の「ズカ」とは同じ語の音転化形であると思うようになった。

そして昭和六十年ごろ私は偶然、江戸時代の江戸傑場の「コズカケ原」を「小骨ケ原」と書いてある地図を見たことがあった。そしてハツと思った。ここは傑場であるからかつて小骨が散らばっていたこともあったであろう。それを「コズカ」といったからこの地名が生まれた、コズカのズカは骨だ。そして長野県方言のズクは、このズカ（骨）の音転化形に違いない。そう考えるようになった。

ズクは骨である。そう考えると、「ズクがある」という慣用句は、「人間的な骨格がしゃんとしていること」「ズクなし」というのは、「精神・身体的な骨格がぐにやぐにやしていること」「ズクをやむ」というのは、「骨を惜しむこと」という意味の一貫性がはつきりとわかってくる。

ズクということばは東日本各地に点在して残存していることは分かっているが、長野県のように全県的に、しかもその生命を十分に發揮して使われている地方はないことも付け加えて稿を結びとする。

(六二・三・二六)

本稿は昭和六十一年七月三日の国語国文学会での発表を元としている。発表では民族学的研究、社会言語学的研究にもふれようとしたが、時間の都合で省略した。本稿でもそれを省略したことを付記する。